

Building lifestyle around Ferrari

70周年よりプロレス

オカダ・カズチカ選手の表紙を見て驚いた方も多いただろう。赤い488GTBは彼の"愛馬"であり、オーナーとして登場頂いたのだが、実はそんな単純な話ではない。



何 故プロレスか。何故新日本プロレスか。何故オカダ・カズチカ選手か。まずはその話から始めねばなるまい。

本誌の表紙にフェラーリ関係者以外の人物が登場するのは、No.114の熊川哲也さんが初めてで、今回はそれ以来のこととなる。熊川さんは昔から熱狂的なフェラーリ・オーナーであり、何よりも限定モデルであるF12tdfを手に入れた直後だったから、納得の人選である。熊川さんが語るパレエの話、特にその歴史に比べればフェラーリの70年なんて短い……という解釈は、衝撃的でした。

プロレスは昔から好きだった。テレビ中継はよく見ていたし、故・三沢光晴(以下敬称略)の技が好きで(タイガードライバー!)、全日本プロレスの中継は夜中になっても必ず生で見た。月曜日の朝は毎週寝不足で、高校時代、1時間目の授業が体育だった時は辛かった。社会人になると、当時所属する編集部の同僚がリングサイド席を手配してくれた、新日本プロレスの試合を何度か観戦した。まさに闘魂三銃士全盛の時代で、蝶野正洋やスタン・ハンセンの入場曲がカッコイイなあと。

ということでその後観戦こそなかったが、プロレス全般は何となく気にしてきた。一時期低迷した新日本プロレスが、棚橋

弘至の踏ん張りで盛り返し、中邑真輔、内藤哲也、そしてオカダ・カズチカというスターが続々と生まれたのは素直に嬉しかった。そんな時である、オカダ・カズチカがフェラーリ・オーナーであるとの噂を耳にしたのは。そこで調べてみると本人だけでなく、父親も308乗りらしいというではないか。もしや、フェラーリ好きは筋金入りなのでは? これだ!

そこから出演交渉に入り、無事に実現したのが今回の表紙と記事。何とプロレス専門誌と自著以外では初の表紙出演だというから光栄だ。しかしよくある、"フェラーリ好きの有名人"という記事にはしたくなかった。バックグラウンドやプロレスに対する想いもたっぷり盛り込んだ"アスリート、オカダ・カズチカ"と真剣に向き合った記事にしたかった。

果たしてそんな記事になったかどうかは皆様にご判断頂くとして、結果的にオカダ選手はSCUDERIAのことも知っていたし、お父様に関するひとつの"奇跡"もあった。前回このコラムに作り手の"熱量"を注ぎ込みたいと書いたが、今回の記事もそんな私の"熱い"想いから始まっているのであり、ポルトフィーノや70周年記念イベントよりも記事のボリュームが圧倒的に大きいのは、つまりはそういうことなのである。